

令和元年 12 月 26 日

文責：内田さやか（東大院総合文化）

日本学術会議 化学委員会無機化学分科会（第 24 期・第 3 回）議事録

日時：令和元年 12 月 26 日（木）14:30~15:25

会場：日本学術会議 6 階 6-A(2)会議室

出席者（敬称略）：委員長 塩谷 光彦、副委員長 田中 晃二、幹事 長谷川 美貴、幹事（書記）内田 さやか、井頭 麻子、加藤 昌子、北川 進、北川 宏、酒井 健、巽 和行、谷口 功、西原 寛、山下 正 廣、山本 陽介

欠席者（敬称略）：所 裕子、玉田 薫

報告・審議事項

(1) ACCC 7 の開催報告と今後の予定（山下、配布資料有）

内容：2019/10/15-18 にクアラルンプール(マレーシア)にて、Prof. Yang Farina Abd Aziz と Prof. Geok Bee Teh を世話人として開催された。参加者は 27 か国・地域から約 300 名のうち半数が日本から。講演者の地域・ジェンダー・年齢バランスがとれた会議であったが、クレジットカードのスキミング被害が多数発生したので今後も要注意。ACCC 8 は 2021/7/25-29 に国立台湾大学にて開催予定。ACCC9 はタイ、ACCC10 はベトナムにて開催予定。

(2) アジア最先端ハイブリッド物質研究連携センター設置に向けた WG の活動状況と今後の方針について：日本学術会議「大型施設・設備」マスタープラン（山下、配布資料有）

内容：東北大・山下教授と熊本大・杉本准教授の作成案に基づき説明がなされた。準備期間 2 年、運用 10 年、総額 850 億とし、東北大と分子研を拠点として任期付き PI を雇用し、実物質ライブラリー作成、実験・計測に関わる大型設備を設置。

今後の課題：有機化学など他の分科会からも、大型設備の設置を含む同様の提案がなされている。採択のためには他の分科会と連携して内容を集約する必要がある。

(3) 国際情報発信強化（International Conferences, CSJ Journals）（塩谷）

内容：現在、日本化学会の論文誌である Chem. Lett. と Bull. Chem. Soc. Jpn. は、中国からの投稿が約 4 割を占める。また、編集・出版体制と国際力発信強化のための科研費を取得し、2 期目に入っている。前者に関し、論文誌専任の正規職員による強化が図られている。後者に関し、特に中国との連携が重要なため、上海に拠点が作られた。外国人の associate editor や reviewer を増やしていくことも重要ではあるが、国内の reviewer の方が質が高いのが現状である。

(4) その他

・学協会の連携・融合の必要性：日本化学連合はあまり機能していない。地方では複数の学協会が連携した研究会が活発に開催されており、地方から中央への波及効果が期待される。

・研究における日本の国際地位の低下：運営費強化による研究力底上げとともに、40 代から 50 代前半程度の尖った研究者が必要。現状、AI に国費が投入されているが、結局はタレントが少なく、もともと強い材料系への投入が必要。